

2020年2月9日

第4挿話から約1時間が経過、リアポウルド・ブルームはリフィー川の南岸を歩いている。周囲に「誰もいない」ことを確認してから(UY 5.129)、ウェストランド通りにある郵便局に入り、局留めの手紙を受け取る。彼は「ヘンリー・フラワー」の偽名で、密かにある女性と文通をしている(この行為は、モリーとボイランの〈不義〉に対応する)。周囲への警戒から脇ポケットの中で封筒を破るものの、知り合いのマッコイと出くわしてしまう。ディグナムの葬式についての話をマッコイに対して、適当に話を合わせながら、彼の視線は通りの向かいで「二輪馬車」に乗り込もうとする女性のスカートの中身(もっとも、この企みは目の前を通過する路面電車によって遮られる)や、フリーマン・ジャーナル新聞(第4挿話との幕間で彼は1ペンスで購入したらしい(U 17.1459))に掲載されていた「プラムトリー印のミートパテ」の広告に「うわのそらに」向かう(U-Y 5.133)。マッコイと別れた後、ブルームの視線は再び「色とりどりに目を引く広告」の上を彷徨う(“his eyes wandering over the multicoloured hoardings”; U 5.192-93)。昨夜上演された『ハムレット』のオフィーリアから、「自殺」した父のことを思い出す。ここで読者は、第4挿話の息子ルーディの死に次いで、彼にはもうひとつ悲劇的な死があったことを知る(U-Y 5.135-36)。

再び「誰もいない」ことを確認してから、カムバーランド通りの「駐車場の塀の陰」で、「新聞で隠したまま手紙を開く」。文通相手は「マーサ」という名の女性で、彼女のサディスティックな言葉にブルームはマゾヒスティックな性的興奮を覚える。ウェストランド通り駅(現在はピアス駅)近くの「線路のガード下」で封筒を破り捨て、今度は偽名が記されたカードを帽子のバンドの内側に隠すために、「諸聖人教会(現在は聖アンドリュース教会)」に入る(U-Y 5.137-41)。ミサの様子を眺めながら、聖餐や告解、懺悔などの宗教儀式が人々の精神を麻痺させるものであることを考える(「ラテン語とは考えたものだよ。まずはぽかんとさせてしまう。」(U-Y 5.143))。

教会を出たブルームは「スウィニー薬局」に立ち寄り、モリーのための化粧水を注文し、レモン石鹸を購入する。店を出た直後、新聞に書かれた競馬の情報を知りたがるバンタム・ライオンズに呼び止められるが、葬式の前に風呂に入るべく先を急ぎたいブルームは「[新聞は]もう要らないんだ」と言い、ライオンズはその言葉に何かを感じ取る(U-Y 5.150-51)。

挿話の最後で、ブルームは「つねに過ぎ行く、生の流れ、われわれが生の流れの中でたどるそのほうが何よりかによりだああいじなんだ」と考え、浴槽の湯の「柔らかなぬくぬくする流れ」を想像し、そこに浮かぶ自らの体——“This is my body”(U 5.566)——のその中心にある己の性器を「一輪のものうげな漂う花(a languid floating flower)」に擬える(U-Y 5.152)。ブルーム(Bloom=花盛り)からヘンリー・フラワー(Flower)、そして浴槽の「ぬくもりの子宮の中」で浮かぶものへ(floaters)、彼の思考は過去と現在の悲劇を巧みに避けながら流れて(flow)ゆく¹。



スウィニー薬局 (2014年6月16日撮影)

¹ Bloom / Flower / Flow の連関については、浅井学『ジョイスのからくり細工』(あぼろん社、2004年)第1章を参照。